

ICT利用による双方向的中国語文法授業を創造する 体験型音楽語学教材の開発とその教育効果

The Development and the Educational Effectiveness of the Participation Type Music and Language Teaching Material that Designed Interactive Chinese Grammar Class to Facilitate Learning and to Utilize ICT

山田留里子* 賀 南**
長崎外国語大学外国語学部

Abstract: The current state of Chinese language teaching in educational institutions in Japan mainly consists of “one-sided teaching, focused exclusively on the transmission of the knowledge” of Chinese grammar through lectures. The students who have been taught by this method are unable to advance from the elementary level to the intermediate level. Not only that, the number of those who wish to go to China to study is decreasing year after year. In order to solve these problems, it is crucial to develop comprehensive teaching materials that are not only applicable, but are also truly effective in the field of education. With such an objective, we developed the teaching model that introduced “Participation Type Music and Language Teaching Materials” that designed interactive Chinese grammar class for effective learning. In this paper, we are reporting on the verified effects of the educational improvement in the practical classroom teaching that used the teaching materials. We are doing so in two aspects: quantitative aspect (based on exterior evaluation: The remarkable improvement in the success rate of the Chinese-Language Proficiency Test, etc.); the qualitative aspect (based on the questionnaires on the classes). Moreover, we are offering a comprehensive report on the analysis of the results that included the current efforts in the teaching materials, based on the utilization of ICT, as well as on the challenges and problems that still remain.

Keywords: ICT, Interactive Chinese Grammar, Music and Language Teaching Materials

1. はじめに

中国語の規則性や構造を理論的に学ぶという「中国語文法」の授業形態では、「知識の伝達に収束する単方向的授業」を主流にしているのが、我が国の中国語教育界の現状である。つまり学生の総合的語学力の創造もできず、その結果、初級から中級へと引き続き学ぶ学生や中国への留学を希望する学生も全国的に毎年減少しているという教育上の問題点が浮上している。問題の所在を明らかにし、教育改善の目的・目標を明瞭にするため、所属する大学の中国語履修生へ「中国語文法授業」に関する独自のアンケートを自由記述式で実施し、現状把握を行った。その結果、以

下①～④の課題が明確になった。

- ① 文法知識を会話に応用するのが難しく、コミュニケーションツールとして実践が困難。
- ② 文法それ自体を音として捉えにくい。
- ③ 座学中心の文法が苦手。
- ④ 就職に有利な資格試験とリンクしていない。

上述の問題を改善するためには「方法論」の改善、つまり「新たな授業形態の導入」が急務であることが明瞭となったと言える。さて、平成25年度『私立大学教員の授業改善白書』^[1]の調査結果によると、「効果を高める改善策としては、ICTだけに頼らず、対面授業を組み合わせる授業運営することが重要」とし、「授業中にメモを頻繁にとらせ提出を義務付ける、頻繁に小テスト等で学びを確認する、グループワーク等で対話を含む授

Ruriko Yamada*, Nan He
Nagasaki University of Foreign Studies
*E-mail: yamada1211@hotmail.com

業運営を工夫することが必要」とある。つまり、対面授業によって教育の質的保証をし、これと組み合わせたICT利用による事前事後学習によって、教育の量的保証をすることの必要性が再確認されたのである。そこで、これら「質的・量的」保証と本学の教育目標を含む当該シラバスに明記されている「語学力を磨き、コミュニケーション力をつける」と「知識を理解し、取り組む力の達成」との関連性を明確にするため、まずは教育分野での応用・展開が期待できる総合的教材の開発が必須であると考え、対面授業本来のスタイル+ICT利用という新しい感覚を盛り込んだ。以下にこれらの因果関係を図式化する。

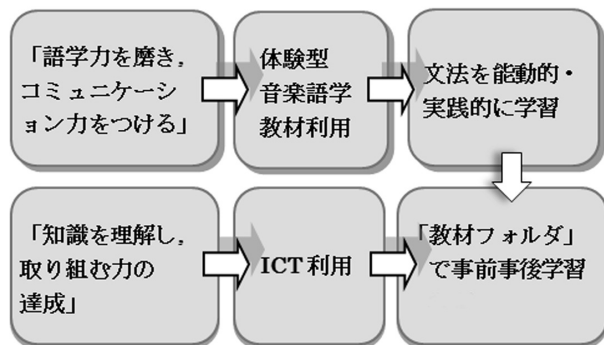


図1 授業運営とシラバス教育目標との関連図

図1が示すように、双方向的中国語文法授業を創造するため「質的保証」として、音楽や単語カードが立体的にデザインされた電子黒板を媒体とする「体験型音楽語学教材」を開発した。また、さらに「量的保証」として、ICT利用の事前事後学習の授業を導入し、実験授業科目としては初級文法クラスとした。理由として、以下の二つを挙げる。

- ① 次へのステップである中級中国語を学修する学生と留学を希望する学生を増加させる。
- ② 本教材の前身である「音楽語学教材」を用いた中国語文法クラスにおける実践授業において、教育改善効果の二つの側面、つまり、量的側面と質的側面からの測定により、既に高い教育効果を上げていることについては確認されている。な

お、量的側面とは外部評価である中国語検定試験合格率の顕著な伸び等であり、質的側面とは所属大学公式授業アンケートおよび自由記述や授業評価点数等の集計結果等である。

本稿においては、さらにデザインしたICT利用による電子黒板媒体の「体験型音楽語学教材」の現在の取り組みも射程に入れた分析結果と残された課題や問題点について総合的に述べる。

2. 教育改善の内容と方法

(1) 開発した教材システムの概要

中国語文法をリズムカルな音楽によって五感で学習し、語学力とコミュニケーション力をつけることのできる体験型・参加型教材と並行する事前事後学習としては、「教材フォルダ」を活用する。以下に、本システム利用による授業改善の内容と方法を述べる。

(2) 改善の内容と方法

① ICT 利用による教育改善

「体験型音楽語学教材」を効果的に実現するためには、授業内容の積極的な事前事後学習が必要である。本学のシラバスには「1単位における予習・復習時間を毎週1時間」（文科省規定）としている。この時間量に最適な量の練習問題を中国語検定試験対策として、ドリル形式で作成した。また、学生への配布方法の一つとしてICT教育支援室の「教材フォルダ」を利用した。この使い方は、「教材フォルダ」にアクセスし、必要な情報をダウンロードしたのちペーパーベースで提出する。パスワードがセッティングされ、学生は授業に出席することによりその情報を得る。つまり、ICT利用は教師と学生が双方向的情報を共有していく条件となる。学生は各自の時間に合わせ、学内外のパソコンで事前事後学習をする教育環境を獲得する。その他の配布内

容としては、「中検試験対策模擬試験問題」や「文法のまとめ」、「振り返りシート」等でこれらを十分に活用することにより、学生は自分の評価を見ることができ、自己教育力と習熟度も確認することができる。以下、図2には、ICT利用による学習過程、

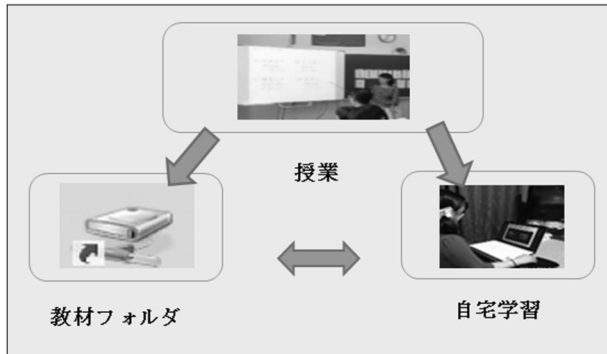


図2 ICT利用による学習過程

第1課 あいさつ

★ 1. 基礎問題

① (1) ~ (5) の中国語の正しいピンイン表記をそれぞれ①~④の中から一つ選ばない。

(1) 見	① jiān	② jiǎn	③ jiàn	④ jián
(2) 吃饭	① chī fàng	② qí fàn	③ qí fàng	④ chī fàn
(3) 什么	① shénme	② shénma	③ shénme	④ shénma
(4) 最近	① zuìjìn	② zuǐjīng	③ zuìjìn	④ zuǐjīng

図3 中国語検定試験対策ドリル例

ふりかえりシート

1. 本日の授業の理解度について、あてはまる項目に○を付けてください。

① “吗?” を付ける一般疑問文

よく理解できた	理解できた	よくわからなかった	わからなかった
◇	◇	◇	◇

② “有没有” の反復疑問文

よく理解できた	理解できた	よくわからなかった	わからなかった
◇	◇	◇	◇

図4 振り返りシート例



図5 事前事後学習の図式化

図3には「検定試験対策ドリル」、図4には「振り返りシート」、図5には「教材フォルダの事前事後の学習の図式化」を掲示した。

② 「体験型音楽語学教材」による教育改善

座学に陥りがちな中国語文法を音楽と同期化したところに、本教材システムの最大の特徴があると言える。これは、図6~7のようなスタイルで、文法を正しく使えるように「文法構造」を音楽に変換した教材で、教室内に装備してある電子黒板上に映し出され、教室内で学生と教師が同時に参加・体験できる画期的なシステムである。電子黒板上には備え付けのペンで書き込みもできるので、ドリル等の答え合わせも可能となり、タイムリーな双方向的授業を展開することも実現している。図6~7は、電子黒板上に映し出される実際の画面で、これら以外動画もあり授業では臨場感溢れる体験もできる。

05 歌で覚える中国語 ①課文

A: 你家有几口人?
Nǐ jiā yǒu jǐ kǒu rén?
ニージ ヲコノ?

B: 我家有五口人。
Wǒ jiā yǒu wǔ kǒu rén.
ウオジ ヲコノ

図6 体験型音楽教材—テキストの本文

疑問文

Q: 你吃什么? 「何を食べますか?」
Nǐ chī shénme?

A: 我吃____。「私は____を食べます」
Wǒ chī

北京菜 Běijīng cài	日本菜 Rìběn cài	法国菜 Fǎguó cài
--------------------	------------------	------------------

図7 体験型音楽教材—テキストの文法

さらに、教師は授業時間中、机間巡視を行い、学生との対話を深め、教師と学生、学生と学生の双方向的授業の創造もより充実することができる(次ページ写真1~6)。これらは古い感覚のスタイルではあるが、

教師と学生が顔を突き合わせ、直接にふれあうことが双方向的授業の教育効果には大切であると考え、さらに既習の文法をコミュニケーションツールとして応用するためのスキット作成なども、ペアやグループスタイルで行う。これにより、学生の主体的・能動的な学びを重視したアクティブ・ラーニングの試みとしての教育方法の改善も実現していると言える。例えば、グループ技法に汎用性の高い「Think-Pair-Share」^[2]を盛り込んだ写真3～6からは、学生の生き生きと輝く「学ぶ楽しさや喜び」が伝わってくる。いわば学生の心に“学びの火”をつけ、モチベーションを上げることは、学生の自主性を育てていく要因となると考える。これも教師の重要な役割であると考え、



写真1 テキストのカード表示



写真2 机間巡視



写真3 まずペアで話し合う



写真4 ミニボードに記入



写真5 ペアで発表



写真6 グループで発表

3. 教育実践による改善効果とその確認

以下に述べる項目におけるデータ比較結果において、教育改善の効果が顕著に認められた。

(1) 一般財団法人日本中国語検定協会主催・中国語検定試験の合格者率上昇及びスコア別比較

表1を参考にすると、各級の学習時間は、準4級は60時間～120時間、4級は120時間～200時間としており^[3]、大学中国語教育においては、4月入学の場合、11月実施の試験において準4級、3月実施の試験において4級受験が一般的とされる。本学においては、実験的な見地から準4級を6月に、4級を11月に受験させており、表1における準4級・4級の学習時間の目安からすると、本学の学生が短期間で学習到達していることが分かる。

表1 中国語検定試験準4級・4級概要^[3]
(抽出抜粋後文字数調整のために簡潔化)

	準4級	4級
学習目標	中国語学習の準備完了 学習を進めていく上での基礎的知識を身につけている	中国語の基礎をマスター 平易な中国語を聞き、話すことができる
学習時間	60～120時間 一般大学の第二外国語における第一年度前期修了程度	120～200時間 一般大学の第二外国語における第一年度履修程度
基準語数	基礎単語約500語 簡体字を正しく書けること、ピンインの読み方と綴り方、単文の基本文型、簡単な日常挨拶語約50～80	常用語500～1000語 単語の意味、漢字のピンインへの表記がえ、ピンインの漢字への表記がえ、常用語500～1,000での単文の日訳と中訳

① 準4級・4級合格率(合格ライン60点)の伸び

図8～9を見ると⁽¹⁾受講者数(25名)中、準4級は14名受験、4級は16名受験し、各級の合格率は2012年度と比較して2013年度に顕著な伸びがあることが分かる。

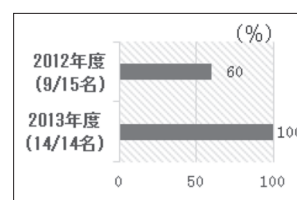


図8 準4級合格率の伸び

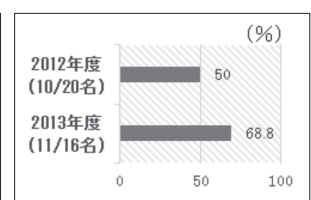


図9 4級合格率の伸び

2012年度に比べ2013年度の受験者数が若干減少している原因としては、学生の受験申込時期のタイミングによるものやさら

により高い級を目標に設定することにより
次回の検定試験に受験をまわす傾向による
影響であると考える。

② 準4級及び4級（リスニング・筆記別）
獲得スコアの全国平均との比較による教育効果の向上

ここで注目したいのは、図10～12における各級の得点分布図である^[4]。本学のスコアが全国と比べ高得点に集中し、その結果として次ページ図13～14のグラフに見られるように、本学の合格率が全国と比較し、かなり高い数値をマークしていることが分かる。これら合格率がアップした教育環境の背景には、他の中国語科目との連携や教師の熱意などの要因もあると考えるのは当然である。しかし、各自の学習到達度に合わせた課題を主体的に学ぶことにより、その結果学習意欲が向上し、さらにその学習過程において各自が最適な学習方法などを獲得したことこそが、教育改善効果の顕著な向上に繋がったと言える^[5]。ICT利用による授業が学生の能動的学習を大きく開花させたのである。

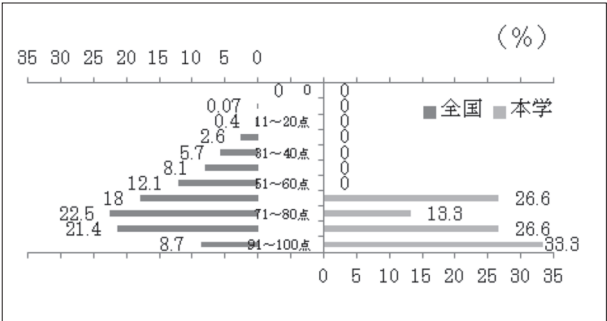


図10 第80回準4級筆記&ヒアリング得点分布図

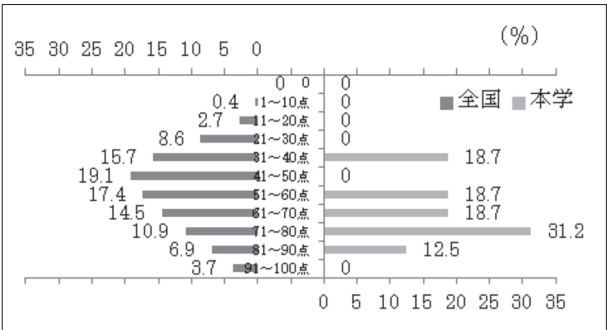


図11 第81回4級ヒアリング得点分布図

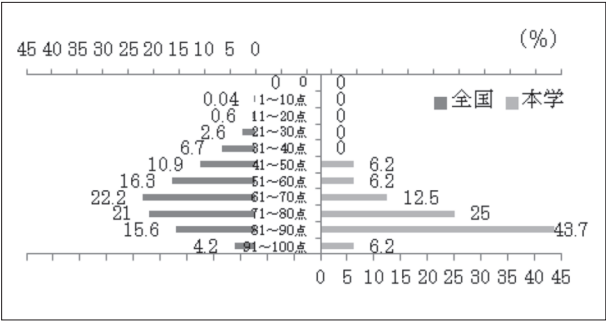


図12 第81回4級筆記得点分布図

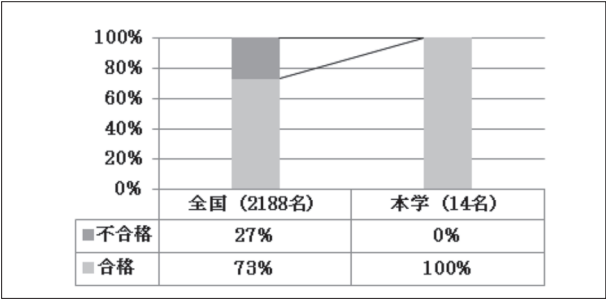


図13 第80回準4級合格率（全国・本学）

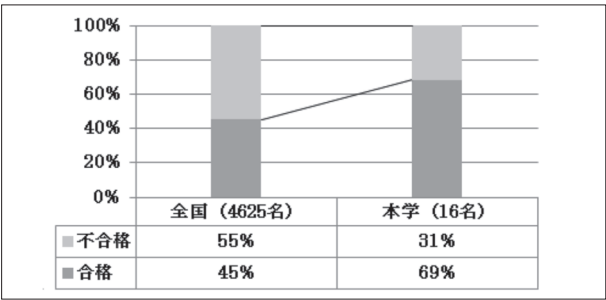


図14 第81回4級合格率（全国・本学）

（2）公式授業アンケートについて

以下の表2は、春・秋学期における公式授業アンケートの授業評価点数である。春学期と比較すると秋学期は、評価点数の最高6ポイント中、以下の3項目すべてにおいて0.2ポイント上昇しており、教育改善の向上が顕著に認められたと言える。また次ページの自由記述からも学生の成長が認められ、これに比例して、以下（3）に述べる短期・長期の留学希望者数も飛躍的に増加したことが分かる。

表2 授業評価アンケート評価点数
最高授業評価ポイント：6.0

主な項目	春学期	秋学期
①授業の内容はわかりやすかった。	5.4	5.6
②私はこの授業によって学習意欲が喚起された。	5.3	5.5
③総合的にみて、この授業は私にとって有益だった。	5.3	5.5

自由記述の一部：「中国語は楽しい」「授業外、いつでも学習できる」、「中国語の音楽が耳から離れない」、「このような授業をもっと増やしてほしい」、「難しいと思っていた文法が大変分かりやすかった」、「来学期の授業も絶対受けたい」

(3) 留学希望者の増加

2013年度と2014年度における中国への留学希望者は、短期留学0名から11名へ、長期留学6名から11名へと飛躍的に伸びた。なおここにおける短期留学とは、2週間（～1か月）留学することで卒業単位を取得、長期留学とは、半年～1年留学し、留学先の大学にて単位を取得し帰国後卒業単位として、通常、一括認定をする制度を指す。

4. まとめと今後の発展

ICT 利用による「教材フォルダ」の活用により、学生は授業以外の時間や場所で自分の生活スタイルに合わせ課題や問題を確認することができるようになった。これら主体的な学修サイクルは、留学準備学習や検定試験の合格力を自分の力でデザインできるという教育プログラムとなり、中国語以外の様々な外国語教育にも活用できるものと考えられる。今後の課題として「教材フォルダ」の使用頻度などの調査分析があげられる。以下表3は、「教材フォルダ」内の資料と「中国語文法」におけるループリックによる評価手法との相関表である。

表3 ループリックによる評価手法との相関表

評価手法	%	説明
①試験（中間・期末）	40	40点満点の試験問題
②小テストなど	30	「中検試験対策問題ドリル」提出を数値化
③授業態度など	15	出席回数を数値化
④その他	15	「振り返りシート」等の提出を数値化

「教材フォルダ」の利用は、手法②や手法④を「中検試験対策問題ドリル」や「振り返

りシート」などの提出により配点しているが、これらの手法によって得られる数値を経年比較などによって分析すれば、さらにICT利用の教育改善効果が顕著になっていくと考える。また今後本学 ICT 教育支援室の「課題回収システム」の活用を積極的に行い、この集計結果分析をもとに、ICT利用によるより効果的な教材開発の応用・展開をしていきたい。

謝辞

協力者の長野由季、石井英恵、石井健太郎、木村薫、小熊未央の諸氏へ感謝の意を表したい。

注

(1)第82回（2014年6月23日実施）準4級における本学スコアは平均点87.14点・合格率100%で全国平均73.9点・合格率81.4%より高い。

参考文献および関連URL

- [1] 公益社団法人私立大学情報教育協会: 私立大学教員授業改善白書.平成25年度の調査結果,p.8, 2014.
<http://www.juce.jp/>（2014年8月18日参照）
- [2] 山地弘起: 特集 アクティブ・ラーニングとは何か. 大学教育と情報, 2014年度No.1, 公益社団法人 私立大学情報教育協会, pp.2-7, 2014.
<http://www.juce.jp/>（2014年8月18日参照）
- [3] 一般財団法人日本中国語検定協会
<http://www.chuken.gr.jp/>（2014年8月18日参照）
- [4] 一般財団法人日本中国語検定協会: 得点分布資料, 中国語検定試験第79回2013年3月24日実施分・第80回2013年6月23日実施分・第81回2013年11月24日実施分.
- [5] 公益社団法人私立大学情報協会: 大学教育への提言—未知の時代を切り拓く教育とICT活用.
<http://www.juce.jp/>（2014年8月18日参照）